

陳舜臣さんを語る会通信

NO.115 May. 2024

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

編集「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2024年5月5日

<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

一読、興奮し幾晩も睡れなかった『Red Star over China』の中国語訳『西行漫記』

1976年9月9日、毛沢東（1893-）が亡くなった。毛沢東死去の情報に接し、陳舜臣さんは「歴史を見る毛主席」を『朝日ジャーナル』に、「詩人教師毛主席」を『現代』に、「巨星墜つ—毛主席のこと」を『小説現代』に執筆しました。この三つのうち、本通信前号で、「詩人教師毛主席」を取り上げましたが、陳舜臣さんは、『西行漫記』を読んだときのことを、「私は二十にすぎなかったが、興奮をおさえることができなかった。幾晩も睡れなかったことをおぼえている」と述懐しています。

本号では、エドガー・スノウ著『Red Star over China』の日本語訳、宇佐美誠次郎訳『新版 中国の赤い星』（1964 筑摩書房）を取り上げ、少し詳しく見ていきます。（編集委員 橘雄三）



上の地図は上掲、宇佐美誠次郎訳『新版 中国の赤い星』巻末添付のものです（一部編集委員加工）。また、左の画像は同著表紙です。

宇佐美誠次郎訳『中国の赤い星』(1964 筑摩書房) 内容紹介(1)

- 一 赤色中国をたずねて
1 ある未回答の問題
2 「西安」行の普通列車
3 漢時代の銅器
4 赤区の門に入る

毛沢東宛紹介状補足 ■ 3 漢時代の銅器で、スノウは、「北京で私に毛沢東宛の手紙を目に見えないリンクで書いてくれた人は、赤軍の一司令だったと私は承知している」と記述していますが、宇佐美訳『中国の赤い星』訳者あとがきでは、「一九三六年六月、宋慶齡の援助で、ある大学教授から毛沢東あての紹介状をもらい……」となっています。

1 ある未回答の問題及び2 西安行の普通列車 ■ 「1927年11月に湖南省東南部の茶陵で最初の中国ソビエトが樹立されてから、みずから進んでその長城を突破して帰って来て自分の経験を書いた者はなかったのである。ある人は赤軍のようなものがあるということをも否定した。数千の饑餓に瀕した土匪がいたにすぎないとも言い、ある人はソビエトの存在すら否定した。けれども共産主義の同情者たちは赤軍とソビエトとを中国の一切の病患の唯一の救済策としてほめたたえた。この宣伝と逆宣伝のまっただ中では、真理をさがし求める冷静な観察者にとっては信用し得る証拠がなかったのである。私たちはみな赤色中国のことを何か知ろうとする唯一の方法は、現地に行くことだということを認めていた。これを試みた人もいくらかはあったが、失敗した。現地踏査は不可能と信じられた。1936年6月、赤区に入ることできそうな方法を知った。私はこの機会をとらえ、九年来の報道封鎖を突破しようと決心した」

6月はじめ、スノウはソビエト政府首席毛沢東への紹介状だけを持ち、天然痘、腸チフス、コレラほか、できる限りの予防注射をして、北京から列車で、鄭州経由、西安に向かう。

スノウは西安に着くとすぐに陝西綏靖主任楊虎城並びに省政府主席邵力子と会見する。時期は西安事件(1936年12月)前夜であった。ここで、張学良について、そして張学良と蒋介石の関係並びに西安事件へのプロセスが詳述される。

3 漢時代の銅器 ■ ある朝、スノウ、G. P. U局長鄧発ら、4人は西安郊外にある漢朝の古宮遺址へ出かけ、小高い丘の上で赤区に至る打ち合わせをする。

4 赤区の門に入る ■ ある日の早暁、スノウは、東北軍のものらしき軍用トラックで、北に向け西安府を出発。二日目の午後、当時、東北軍支配下にあった延安着。翌日早朝、スノウと騾夫(らふ、荷を背負わすらばを馭す人)は延安を出発、次々、案内人、騾夫が代わり、翌々日、ソビエト主席毛沢東がいと当時信じていた安塞に着く。

- 二 赤都への道
1 白匪に追われて
2 暴動扇動者
3 賀龍について
4 赤い連れ

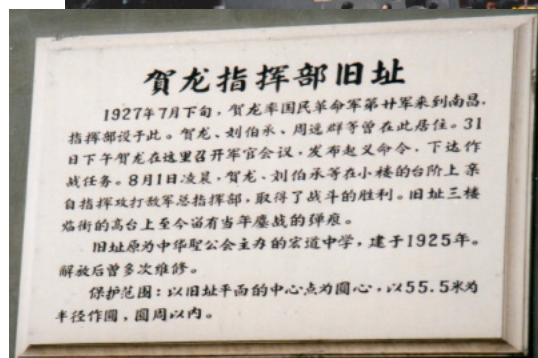
1 白匪に追われて ■ 安塞に着いたがそこには毛沢東は居ず、安塞近くの小さな村、百家坪で周恩来に出会う。スノウは、周恩来から「反逆者に転向した学者」という印象を受ける。

2 暴動扇動者 ■ フランスほかヨーロッパへの留学、黄埔軍官学校政治部主任など、周恩来の経歴が語られる。それとともに、第一次国共合作(1924.1-27.7)、上海クーデター(1927年4月)、南昌での八・一暴動(1927年)など、時代背景についても略述される。

スノウは、当時、臨時ソビエト首府は保安にあって、毛沢東ほかソビエト要人がそこに居ることを知り、貨物輸送隊を護衛する40名ほどの青年の一隊と保安へ向かう。**3 賀龍について** ■ 一隊の李長林司令の体験として、賀龍について語られる。賀龍の父は、秘密結社哥老会の幹部であった。賀龍は、1927年、南昌での八・一暴動に加わり共産党に転向、以来、赤軍幹部として活躍した。**4 赤い連れ** ■ スノウの「どうして赤軍に参加したか？」に対する一隊の若者たちの答えの聞き書き。



南昌八一起義紀念館
ここに総司令部を置いた
元江西大旅社というホテル
■このページの画像は、3
枚とも編集委員撮影



左は賀龍指揮部旧址と説明板
説明板には、「八月一日未明、賀龍、劉伯承らは小楼台に登り、自ら敵軍総指揮部攻撃を指揮し、勝利した」と記されている。

『中国の赤い星』理解の一助に / 中国史流れ図(中華民国成立から日本の敗戦まで)

1912.1~中華民国成立 首都 南京 孫文臨時大總統

1912.2 袁世凱、宣統帝の退位 (2/12) を実現させる。臨時大總統、大總統、皇帝(15.12.12-16.3.22)。16.6.6 袁世凱急死

1915.1 日本(大隈重信内閣)、二十一か条要求。最後通牒の5月7日は「国恥記念日」に。

[袁世凱後の北京政府]

(中華民国の正統政府を主張)

12年にわたる軍閥時代

1916.7-17.7 黎元洪(大總統)

段祺瑞(國務總理)

1917.8-18.10 馮國璋(大總統)

段祺瑞(國務總理)

1918.10-22.6 徐世昌(大總統)

段祺瑞(安徽派)は、国会で多数派工作を行い、気心の知れた徐世昌を選任して馮國璋(直隸派)を大總統の地位から引きずり下ろした⇒安徽派と直隸派の対立、表面化⇒安直戦争へ

1919 バリで第一次世界大戦の講和会議開催。中国は戦勝国側だったがドイツ権益の回収ならず。⇒五・四運動

1920.7 安直戦争

[安徽派] 段祺瑞←日本支援

[直隸派] 曹錕、呉佩孚←英米支援

[奉天派] 張作霖が[直]側に与し、[直]の勝利。

1922.4-5月 第1次奉直戦争

1920年に成立した奉直連合政権内における対立が原因

[奉天派] 張作霖←日本支援

[直隸派] 曹錕、呉佩孚、馮玉祥←英米支援。[直]の勝利

■馮玉祥：西北軍閥の首領。安徽派の段祺瑞に従い、のち直隸派に接近。1924年の第2次奉直戦争では奉天派と結ぶ。

1922.6-23.6 黎元洪(大總統)

「誰もが反対しない大總統」として、隠居生活を楽しんでいた黎元洪を擁立

1923.10-24.11 曹錕(大總統)

1924.9-10月 第2次奉直戦争

[奉天派] 張作霖

[直隸派] 曹錕、呉佩孚

[直]側馮玉祥の内応もあって[奉]の勝利。結果、呉佩孚の下野、張作霖の北京進出となった。

1924.10 馮玉祥、クーデターをおこし、北京を掌握。溥儀、紫禁城退去

1924.11-26.4 段祺瑞(臨時執政)

馮玉祥と張作霖の支持を受け返り咲く

1927.6-28.6 張作霖(大元帥)

蒋介石の北伐軍に敗れ、奉天(現・瀋陽)に帰る途中、日本軍に爆殺される。

地方には地方で、多くの大小軍閥が割拠していた。各省に派遣された都督(督軍)も軍閥そのものであった。また、各地を自己の王国のごとく支配していた在地軍閥のなかには、省議会と一緒に、中央政府が派遣した軍閥を追い払う場合もあった。

[広東軍政府]

北京の段祺瑞政権が日本の支援を受けて全国統一に乗り出す形勢となったことに危機感を持った孫文は上海から広州に移り、「約法」を守るための政府を樹立、大元帥となる。辛亥革命の理念に固執する孫文と西南諸軍閥の連合政権であったため内紛によって3度断続。

第1次1917.9-20.10 18年5月、孫文、大元帥を辞し、代理を残し、自らは上海へ去る。上海で中国国民党結成。

第2次1921.5-22.6 上海で雌伏していた孫文を救ったのは陳炯明であった。そして、この孫文政権を崩壊させたのも陳炯明だった。

第3次1923.3-25.6 中小地方軍閥を金で雇い陳炯明を追い出す。1924年10月、商団事件(指導者陳廉伯)。

1919.10 孫文、上海で中国国民党を結成

秘密結社中華革命党を五・四運動の影響下に改組・改称し、大衆政党とした。(1912年、中国同盟会を中心に、公開の政党へ改組した国民党とは別) コミンテルンはこれを革命的ブルジョワジーと規定

ソ連邦の支援(コミンテルンの指導)

1921 中国共産党創立大会(上海で)
委員長 陳独秀

1923 孫文、ヨッフエ共同声明(連ソ・容共・扶助工農を確認)

1924.1 第一次国共合作(一27.7まで)

軍閥に頼らず独自の武力をもちたい。ソ連も革命軍の必要性を説き支援
1924.6 黄埔軍官学校開校。校長、蒋介石

1925.3 孫文死去

1925.5.30 五・三〇事件(上海、広州、香港) 反帝国主義運動

1925.7 広州国民政府樹立(主席：汪兆銘) 孫文時代の大元帥統治の軍政府を解体し、国民党中央執行委員会が指導する国民政府を樹立
1926 蒋介石を總司令として北伐開始

1927.1 長江流域に進出、武漢政府を立てる(主席：汪兆銘)

但し、蒋介石は、軍を率い南昌に留まり武漢政府に合流せず。蒋介石には、武漢政府は共産党に乗っ取られた政権と映っていた

1927.4.12 上海クーデター
(蒋介石、反共クーデターを断行)

1927.4 蒋介石、南京に国民政府を樹立
(主席：蒋介石)

1927.7 武漢政府に残った汪兆銘
ら国民党左派も共産党員を放逐

1927.9 武漢政府、南京政府に合流

1928.4

.6

蒋介石率いる国民革命軍北京入城

1931.9.18

柳条湖事件

日中戦争始まる

1932.1-5月

上海事変(第一次)

1936.12.12

西安事件

1937.7.7

盧溝橋事件

1937.8

上海事変(第二次)

1930末-1934 国民党、5次

にわたる圍剿

1937.9 第二次国共合作(一46.7まで)

1937年11月20日 国民政府は、日本軍の首都南京侵攻の前に

して重慶への「遷都宣言」を発表し、移転を開始

1937.12.13 日本軍南京占領

1945.9.2 日本降伏



誰もが知っている、瑞金にある「紅井」と石碑
吃水不忘挖井人
時刻想念毛主席

1927.8.1 南昌起義
共産党が独自の軍隊をもった最初。八一建軍節
これに呼応して秋収蜂起。すべて失敗

1927.9末 毛沢東、井岡山山岳地帯へ。三湾改編。

毛沢東、朱徳らの指導の下に、国民政府の掃共

戦争に対抗、地盤を拡大

1927.12 広東コミューン

1931 瑞金に中華ソヴィエト共和国を樹立

(主席：毛沢東) ※ソヴィエト：労働者と兵士の

代表による評議会(労兵会)

1934 長征へ

『中国の赤い星』内容紹介(2)

- 三 保安にて
 1 ソビエトの巨頭
 2 共産党の基本的政策
 3 日本との戦争
 4 首に懸けられた二百万元
 5 赤い劇場



1936年の毛沢東
 (46歳 保安)

■松岡洋子訳『中国の赤い星 増補改訂版』
 風貌がよく出ている

保安に到着。スノウはここで、「中華人民蘇維埃共和国」主席毛沢東に会う。
1 ソビエトの巨頭 ■スノウは「私はかれ(毛沢東)といく夜も広範囲の話題について話した」。話についての具体的内容は第四章以降で詳述される。また、スノウは「(毛沢東は)農民出身であったが、青年時代、多くの共産党員ほど地主の抑圧を個人的に受けてはいなかった。マルクス主義はかれの思想の核心ではあるが、階級的憎悪はかれにとって行動に対する推進力であるというよりは、かれの哲学における堡壘の一機構であったと私は推論する」と言っている。至言である。毛沢東の生家は煉瓦積みに瓦葺き、一部藁葺き屋根の農家であるが、『ワイルド・スワン』では、ユン・チアンが、「けっこう広くて立派な家で、悪辣な地主に搾取される貧農のあばら家を思い描いていた私の想像とは、かけ離れていた」と表現している。■毛沢東の前妻を楊開輝としている。この箇所、松岡洋子訳『中国の赤い星 増補改訂版』(1972 筑摩書房)では楊開慧。また、こんな記述がある。「毛は湖南人であるので「愛辣」の癖をもち、パンの中まで胡椒をいれてたべた」「かれが胡椒好きの人間は革命的であるという理論をでっち上げるのを私はきいた。かれは第一に革命家を生むので有名なかれの故郷、湖南省を例としてあげた」

2 共産党の基本的政策 ■1921年中国共産党創立、1923年孫文・ヨッフエ共同宣言、1924年1月第一次国共合作(～27年7月)、1927年4月上海クーデター、1930年末～34年国民党による反共「清勦」(瑞金)、1931年柳条湖事件など、歴史的事実を顧みながら共産党の基本政策に触れる。**3 日本との戦争** ■この節に、口述筆記の様子についての記述がある。「私のとなりに坐っていたのは、若いソビエト「役員」の呉亮平で、かれは私の毛沢東との「公式の」会見で通訳をつとめた。私は毛沢東の私の質問にたいする解答を、細大もらさず英語で書いた。それはやがて中国語に翻訳され毛はこれを訂正した」。このような形式で口述筆記は進んだ。あと、**4 首に懸けられた二百万元** ■ここでは赤軍大学と、その校長で28歳の軍司令官・林彪について語られる。多くの有名な候補生の首に懸けられた賞金の総額は二百万元をこしていた。**5 赤い劇場** ■その日の日没前、候補生、騾夫、靴工場などの女工、郵便局の職員、大工、子どもたち、村民すべてが、野外舞台のある草原へ集まっていた。出し物は、侵略という外題だった。1931年の満州の一村落が舞台で、深刻なテーマながらユーモアと土語で笑いを誘うものだった。プログラムの二番目、12人の女優が収穫舞を見事に演じた。



↑ 赤軍大学生の劇場
 ■宇佐美誠次郎訳
 『新版 中国の赤い星』



↑ 毛沢東とエドガー・スノウ
 ■『図説中国の歴史9』
 (1977 講談社)



← 毛沢東生家
 ■編集委員撮影

『中国の赤い星』内容紹介(3)

四一共産主義者の来歴
(前半)

1 幼年時代

2 長沙時代

3 革命の前夜



この「水井」だけは火災を免れ、毛沢東が学んだ頃のまま

「私は毛沢東にその生涯について答えてくれるように、ながい質問表をわたしておいた」。毛沢東は「あなたの質問はひとまず別として、そのかわり私の生涯のざっとした概略を申し上げたいが、どうでしょう」と言って、話し始めた。「かれはいっさいを記憶の中から物語り、私はそれをかれが話すままに書きとった」。

1 幼年時代 ■ 「私は1893年湖南省の湘潭県韶山村で生まれました。…。私の父は貧農で、まだ若いじぶんに借金がかさんだので、やむなく軍隊に入らざるをえませんでした」。長い入隊ののちに韶山村に戻り、注意深く節約し、小商売とその他の事業で小金をこしらえ、自分の土地を買い戻しました。年々土地を買い増し、農業のほかは穀物の輸送と販売を始め、中農から更に富農になり、村では大金持ちと考えられました。「私は8歳の時に土地の小学校で学びはじめ、13歳の時までそこにかよいました。朝早くと夜、私は田畑で働きました。…。父は私が少し文字をおぼえると、すぐに一家の帳簿をつけさせようとなりました。父がさかんに言うので、私は夜になると計算の仕事をはじめました」。16歳になった時、湘郷県に、従兄弟が通う、経書ではなく、西洋の新しい学問を多く教える学校のあることを知ります。父は友人たちが、この学校の進歩的な教育は金儲けの能力を増すと説いたので入学に同意します。また、従兄弟の送ってくれた保皇派の機関紙『新民叢報』などを通じ、康有為、梁啓超を崇拜するようになります。

2 長沙時代 ■ 1911年春、毛沢東は長沙に赴き中学に入学しますが、10月に辛亥革命が勃発すると数人の友達と、黎元洪の革命軍に参加します。※黎元洪は清朝の高官ですが、それが、革命軍に担がれ、やがて、革命軍司令官に就任することとなります。軍の給料は7元で、食費と飲水代の残りは新聞に使いました。しかし、半年後、清朝が事実上崩壊したことにより、学校へ戻ります。毛沢東は、新聞の広告を見て、警察学校、石嶽学校、法律学校など、これはと思った中学を受験し、入学手続きをし、入学料を払い、時には授業料まで払った後に、気が変わるといったことを繰り返します。そんな後、1913年、省立第四師範学校へ入学します。のち、第一師範に合併、18年に卒業します。

3 革命の前夜 ■ 「長沙の師範学校に在学しているあいだに私の使った金は全部で—いくども払った入学料をもふくめて—たった百六十元でした。そのうちの三分の一は新聞に使わなければなりません。父はこの浪費を罵倒してむだな紙ぺらに使うむだな金だと言いました。けれども私は新聞を読む癖をつけてしまって、1911年から井崗山に登る1927年までのあいだ、北京・上海および湖南の日刊新聞を読むことを一度も中絶しませんでした」。毛沢東は師範学校を卒業すると湖南出身の学生たちと連れ立ち上京します。北京では、北京大学の教授になっていた師範学校時代の恩師楊昌済の口ききで同大学の図書館に職を得ます。また、楊教授の娘、開慧(原文はここも開輝)と出会い恋仲になり、1920年(竹内実『毛沢東』では1921年)に結婚します。この頃、陳独秀や胡適とも面識ができます。 ※開慧、開輝ともにピンインは kai hui



湖南第一師範学校 ■ 日本の青山師範がモデル。一九三八年の長沙大火事で建物は全焼。「水井」だけが焼け残った。一九六八年再建。下は復元された毛沢東のベッド



■ この頁の写真はすべて
編集委員撮影



学校閱報室 ■ 説明板「毛沢東は在籍中、いつも世界地図、英漢辞典とノートを持って閱報室へ来て、新聞を閲読し、国内外の重大な出来事を研究した。教師や学生たちは皆んな敬服し、かれを「時事通」と呼んだ。
また、友達は、彼を探すときは、先ず、閱報室をのぞいた。

『中国の赤い星』内容紹介(4)

四一共産主義者の来歴
(後半)

4国民革命時代

5ソビエト運動

6赤軍の成長

4国民革命時代■時代は、中国共産党創立大会(1921 上海)、第一次国共合作(1924.1-27.7)へと進みます。この、国共合作の時期、「1924年3月には私は上海の国民党執行委員会の委員としての工作と、共産党執行委員会の工作とを兼任しました。…。その夏に黄埔軍官学校が設立されました」。孫文死去(1925. 3)、蒋介石を総司令として北伐開始(1926)、上海クーデター(1927.4 蒋介石、反共クーデターを断行)。それでも、陳独秀は依然として、国民党に譲歩し、日和見主義的な態度・方針で共産党中央委員会を支配します。ついに、南昌での八・一暴動(1927)となります。

5ソビエト運動■「私(スノウ)は、1927年における共産党の失敗、武漢連立政府の敗退および南京(蒋介石)独裁の完全な勝利にたいしていちばん責任のあるのは誰だと思うか、と毛に質問した」。この質問に対し、毛沢東は、陳独秀とロシア人の最高政治顧問ボロディンの名をあげています。この節、記述は、赤軍組織の最初の行動、南昌暴動(1927. 8. 1)、続いて、秋収暴動へと進みます。後者について一言補足。秋の収穫期は同時に小作米の納入期であり、地主対小作農民の階級矛盾が最も鮮明になる時期で、この時期に蜂起したのです。しかし、ことごとく失敗、1927年冬、毛沢東は農民兵と共に井岡山に入ります。翌年5月、井岡山の麓で、南昌暴動の敗残兵を率いた朱徳と合流します。この節の重要な内容の一つは地方ソビエトの成長→中央ソビエト地区の基礎です。最初のソビエト、湖南省境茶陵に成立(1927. 11)、その後、井岡山、鄂豫皖、海陸豊、江西省銅鼓、福建省永定・上杭と次々、地方ソビエトができ、やがて瑞金に成立する中央ソビエトの基礎が固まっていきます。

6赤軍の成長■1929年初め、国民党軍の攻撃を受けて井岡山を離れた赤軍は、江西省南東部、瑞金を中心に新しい根拠地を建設します。中央ソビエト区です。1934年の長征まで続きます。また、長沙、武漢、南昌など大都市攻撃戦術を主張する李立三について記述されます。この節の後半は、五次にわたる勦滅戦と柳条湖事件(1931. 9. 18)、長征出発(1934. 10)、遵義会議(1935. 1)についての詳細な記述です。なお、井岡山及び瑞金については、私(橘)のホームページ、『中国の友人たち』『井岡山・瑞金への旅』を参照願います。



毛沢東、朱徳が合流した「会師広場」
正面は「井岡山会師記念碑」
井岡山の麓、寧岡



上及び左の写真はいずれも瑞金
上■第二次全国蘇維埃代表大会会址
左■第一次全国蘇維埃代表大会会址

この頁の写真はすべて編集委員撮影

『中国の赤い星』内容紹介(5)

五 長征

- 1 第五次勦滅戦
- 2 一国家の移動
- 3 大渡河の英雄たち
- 4 大草原をよぎる

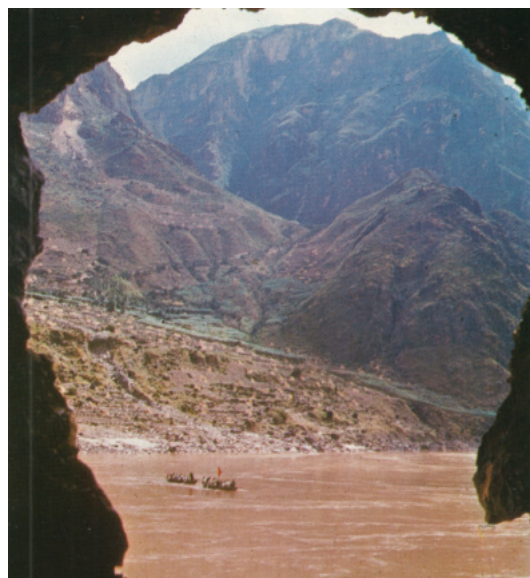
1 **第五次勦滅戦** ■「最初の「勦滅行」、それから第二回、第三回および第四回のそれは敗北ではなかった。どの勦滅戦においても、赤軍は国民党軍の多数の部隊、いな全旅団を破壊し、武器や弾薬の供給を補充し、新しい戦士を集め、そしてかれらの地域を拡大した」。しかし、「1933年10月の終りに南京政府は、第五次の、そして最大の反共戦に動員を行い、その一年後に共産主義者たちは、結局、総退却を行わなければならなかった」。そして、「当時ほとんど誰でもが、これが最後で、赤軍の葬送行進であると考えた」。この考えがいかに誤解だったかということは、「二年近くもたってからはじめて明らかにされた。蒋介石総司令の生命を共産党の手中にゆだねるという事件において、最高潮に達するに至った」。最後の箇所、抽象的表現だが、西安事件を言っていることは明白です。

2 **一国家の移動** ■長征の命令が下され、行軍は1934年10月16日に開始された。第5次勦滅戦で、瑞金のソビエト地区は、国民党軍の、コンクリートで固めた機関銃座とトーチカで何重にも包囲されていたが、総退却の第一関門はこれらを破壊することであった。赤軍は、この作戦で甚大な損害をこうむった。1935年1月、赤軍は貴州省における作戦において、「省主席王の司令部を占拠し、遵義にあるかれの外国式の宮殿を占領」した。『中国の赤い星』には、この箇所、毛沢東主導権確立の出発点となった遵義会議についての記述はありません。「かれら（赤軍）の面前にはまだ揚子江を渡るという問題が残っていた。…。蒋介石ははるか西南部か、チベットの荒地かへ赤軍を追いかもうと考え、すべての渡河地点をおさえ…」たが、金沙江の渡船場絞平渡では、赤軍の渡河を許してしまう。

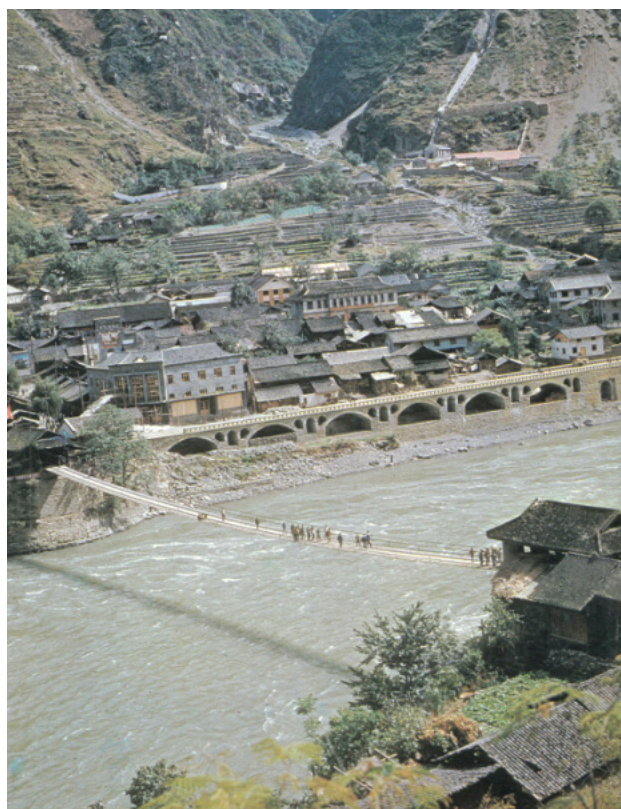
3 **大渡河の英雄たち** ■「大渡河の渡渉は長征の中でもっともきわどい危機一髪という唯一の事件であった」。ここでは、太平天国の石達開の故事まで引いて詳述する。特に、渡渉地点、瀘定橋の占拠を巡っての国民党軍との戦闘は有名。

4 **大草原をよぎる** ■渡河のあとには大雪山、そして大草原が待ち構えていた。特に大草原の移動は困難を極めた。「かれらの前には、もっとも危険なもっとも刺戟の多い旅程が待っていた。なぜならかれらの選んだ道は、独立国をなしている蛮子族や、東部チベットの好戦的種族たる遊牧民西番の住んでいる未開の土地を通らなければならなかったからである」。しかし赤軍はこれらの封鎖線を突破し、「ついに陝西省北部の万里の長城の真下に出た。そして江西省を出発してから満一年目の1935年10月20日に、第一方面軍の先鋒隊は、すでに1933年に陝西省にソビエト政権の小さな基地を設立していた、第二十五・第二十六および第二十七軍と合流した」「赤軍の西北への行軍は、疑いもなく戦略的な退却であるが、それはどう考えても潰走とはよぶことはできない。…。ある意味において、この集団的移住は、歴史上最大の武装宣伝旅行であった。…。かれらは数千の農民を武装させ、赤色遊撃隊を訓練するために幹部をあとに残したが、この遊撃隊はそれ以来、南京軍を奔命に疲れさせた」

長征は道すがらの種蒔きであったのだ。上述した陝西省ソビエトの第二十六軍と第二十七軍を指揮したのが劉子丹（本名志丹）で、かれは1936年3月、戦闘中の傷がもとで死亡する。現在の中国地図を見ると、劉子丹を顕彰し、かつての保安は志丹（保安）となっている。



右は瀘定橋 ■
左は絞車渡（『中国の赤い星』では絞平渡） ■
どちらも『図説中国の歴史9』（一九七七
講談社）



『中国の赤い星』内容紹介(6)

六西北の赤い星

1 陝西ソビエトの端初

2 死と税金

3 ソビエト社会

4 財政の解剖

5 人生は五十から!

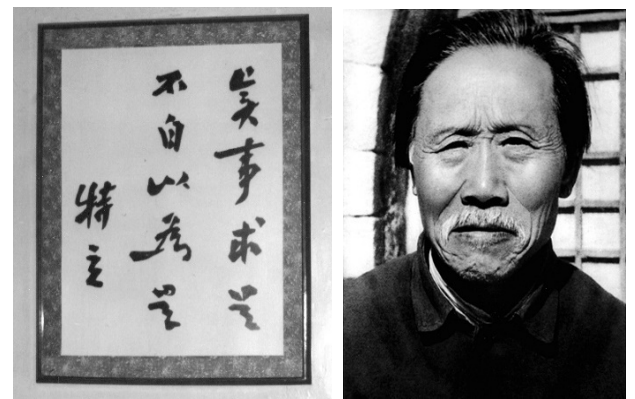
1 陝西ソビエトの端初 ■この節は、劉子丹の経歴を中心に陝西ソビエトの端緒についての記述である。すでに、概略、第五章でふれたので、ここでは省略する。**2 死と税金** ■1929年、スノウ23歳の時、旱魃による西北大飢饉の地を訪れた見聞から記述が始まる。その死者は300万とも、600とも言われるが、そうまで大きな災禍になった原因には、地主、金貸しなどの米退蔵、官吏や軍閥の無関心・無策、容赦のない課税などがあつた。そして、「人々の大多数は、何一つ抗議の行動をとることなしに死んでいったのである。なぜかれらは謀叛をしないのであろうか。…私(スノウ)は、かれらが消極的であることをまったく不思議に感じた。しばらくのあいだ私は何物も中国人を闘わせることはできないものと考えていた。私は誤っていた。中国の農民は消極的ではない。かれらは臆病ではない。かれらに方法と組織と指導と有効な綱領と希望と—そして武器—が与えられるなら、かれらは闘う意志がある。中国における共産主義の発展がそのことを証明した。

3 ソビエト社会 ■「理論的にはソビエトは、「労働者と農民」の政府であつたが、実際上は依然として、選挙民は圧倒的に農民であつた」「西北において共産党を支持した直接の基礎は、あきらかに、孫逸仙博士の約束した「耕者有其田」のごときのものであつた。共産党がその功績として主張できる経済的改良のうち次の四つは、あきらかに農民たちにとってもっとも価値あるものであつた。その四つとは、土地の再分配、高利の廃止、租税搾取の絶滅、および特権階級の排除である。」「赤軍のおもむく所、小作農・貧農・中農・その他いっさいの「持たざる」者たちの境遇を急激に変化せしめたことは疑いない。」「乞食や失業は、赤軍の自称では「清算」されてしまった。纏足と嬰兒殺しは犯罪行為であり、小兒奴隷と売淫は消え失せ、一妻多夫と一夫多妻は禁止された」

4 財政の解剖 ■「赤軍に食糧と武器を供給すること、貧農をただちに救済することとの、少なくとも二つの基本的な機能を満すことは、ソビエト経済にとっての至上命令であつた」。続いて、ソビエト経済における通貨の発行が語られ、財政の収支の「収」がどうして図られたかが語られる。最後、「この問題は共産党の収支をまかなうのを任務としていた白髪の財政人民委員たる林伯渠によって主としてきりぬけられた。林伯渠は…」と、林伯渠が東京で孫逸仙の同盟会に参加したこと、陳独秀に出会い共産党に加入したことなど、かれの経歴が語られる。

5 人生は五十から! ■この節は、次のような文章で始まる徐特立の経歴並びにソビエトの教育制度についての記述である。ソビエト地区で、「教育委員老徐」と親しまれていた当時61歳の「徐特立は50歳の年に、かれの家庭と四人の子供と長沙師範学校の校長の職を思いきって捨てて共産党員とともにかれの将来を賭するにいたった時まで、非常に人望のある教授であつた。…。毛沢東は師範学校時代、かれの教え子のひとりであり…」。

右の画像、人物はウイキペディアより。額は1993年末、編集委員(橘)が湖南省立第一師範学校参観時に写したもの。



エドガー・スノウ著

『Red Star over China』の評價

ウイキペディアの記述(抜粋)は次のとおり、極めて辛辣です。

(同著は) 国民党軍に追われていた毛沢東が書かせた中国共産党の宣伝本の一つ。欧米での中国共産党への共感増加に最も影響を与えた。中国共産党を過度に美化した内容であり、創作と批判されることになるが、出版当時の欧米諸国での中国に対する認識を二重に変え、戦後も途中まで世界に「毛沢東に対する幻想」を抱かせた。著者は中国の「老朋友」第一号になり、文化大革命期も毛から饗されている。

『中国の赤い星』解説、一応の終了

同著についての紹介記事を八頁にわたって書いて、第六章まできました。まだ、やつと半分です。あと、七前線への途上にて八赤軍と共に(上)九赤軍と共に(下)一〇戦争と平和一一保安へもどる一二ふたたび白色区域へエピソード一九四四年と続きます。

ちよつと疲れましたので、これで一応、終了と致します。気力が出来れば、あらためて後半も記述するかも知れません。しないかも知れません。

